

発行：一般社団法人 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS)

URL:<http://www.joskas.jp/>

〒102-8481 東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル (株式会社コングレ内) TEL:03-3263-5394 FAX:03-5216-5552

年頭のご挨拶

一般社団法人 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 理事長
広島大学 学 長

越智 光夫

新年明けましておめでとうございます。

新年のスタートにあたり、JOSKAS 会員の皆様に年頭のご挨拶を申し上げます。

また、日頃より当会の運営に対しご支援ご協力をいただき厚く感謝お礼申し上げます。

昨年7月に福岡で開催された第8回 JOSKAS は、吉矢会長のもと2,730名という過去最高の参加者数をむかえました。また会員数も順調に伸び、今年1月時点で3,912名となっております。JOSKAS が発足から年々と規模が大きくなり、また学術的にも内容が充実していく様を感じます。

特に若い先生方の知識欲の向上には目を見張るものがあり、JOSKAS フェローシップの定員を5名に増員したところ、例年の4倍もの申請がございました。

近年、JOSKAS は若手の育成に力を入れておりますが、それを可能にしているのはひとえに熟練の先生方のサポートに他なりません。

先に述べました JOSKAS フェローシップの受入施設も昨年より6施設増え、若い先生方が学べるチャンスも領域も広くなりました。

7月には JOSKAS の ACL 英文教科書として史野根先生

生、安田和則先生、黒坂昌弘先生にお力添えをいただき『ACL injury and its treatment』を監修・発刊いたしました。

11月には広島大学にて International symposium on ACL injury and its treatment と題し、発刊記念国際シンポジウムを開催いたしました。

当日はあいにくの雨でしたが、会場には近郊を中心に約100名の先生方にご参加いただきました。

午前中は吉矢晋一先生、宗田大先生、黒坂昌弘先生、史野根先生が各30分講演、午後は Kyoung Ho Yoon 先生 (韓国)、Jin Hwan Ahn 先生 (韓国)、Chih-Hwa Chen 先生 (台湾) の海外招待演者と石橋恭之先生、黒田良祐先生、出家正隆先生の合計6名によるシンポジウムを実施し、参加者から積極的な質疑応答もあり、盛況のうちに終了いたしました。

このように今後も、会員のための、ひいては国民の健康増進に資する事業を展開したいと考えておりますので、ご協力を賜りますようよろしくお願い致します。

皆様のご健勝とご活躍を祈念しまして、新年の挨拶とさせていただきます。



International symposium on ACL injury and its treatment
会場の様子



講師・関係者の先生方

新理事挨拶



弘前大学整形外科学 石橋 恭之

この度理事に就任し、教育研修担当理事の他、関節鏡技術認定制度の委員長を担当いたします。JOSKASは整形外科各分野のエキスパートが一堂に会し、数多くの研究成果を海外に発信し続ける活気のある学会です。しかし学術集会での議論の場が少ない点、スポーツ医学との関わり、認定制度など改善しなければならないことが多々あります。本会がさらに魅力のある学会になるように微力ながら努力していますので、ご指導のほどよろしく申し上げます。

徳島大学運動機能外科学 西良 浩一

私は、脊椎外科を専門としております。特にスポーツ選手の脊椎疾患を最も得意としております。さらに、2000年より脊椎内視鏡としてのMED (microendoscopic discectomy) 法を、そして2010年よりPED (percutaneous endoscopic discectomy) 法を行っております。PED法は、MED法をさらに低侵襲とした最前線内視鏡手術であります。局所麻酔で可能です。スポーツ医学、内視鏡手術といったJOSKASのキーワードの2項目を専門としておりますので、今後とも積極的に本学会運営に参画し貢献して行く所存であります。よろしくお願い申し上げます。



愛知医科大学整形外科学 出家 正隆

JOSKASは、私にとって大変思い入れが強い会で、学会設立時より越智理事長の下、学会事務局などに携わらせていただき、また整形外科医として育てていただいた学会です。その会の理事を務めるにあたり大変光栄に存じます。JOSKASは、若い整形外科医を育成するとともに、膝・関節鏡・スポーツ医学の最新最高の治療について研究・議論する場であると思っております。本会から日本・世界に発信できるように会の発展に貢献していきたいと存じます。

北海道大学大学院保健科学研究院 遠山 晴一

今年度より理事を拝命いたしました遠山晴一です。JOSKASとの関わりは前身の一つである日本関節鏡学会主催の第19回関節鏡セミナーを2001年に安田和則先生が開催した際に事務局担当としてお手伝いさせていただいたのが最初だと思います。その際には前年度に関節鏡セミナーを担当された越智理事長ならびに事務局担当であった内尾理事にいろいろご助言をいただいたことを記憶しております。その後、JOSKASではガイドライン委員会、将来構想委員会、機能評価委員会などに関わってまいりました。今年度よりガイドライン委員会担当となりますが、JOSKASの発展のために微力ながら頑張っていく所存ですので、よろしく御願い申し上げます。



大阪府立大学総合リハビリテーション 堀部 秀二

この度、新しくJOSKAS理事に就任致しました大阪府立大学の堀部秀二と申します。昭和56年に大阪大学を卒業して以来、靱帯・半月を中心とした軟部組織損傷の基礎研究、並びに下肢のスポーツ傷害治療の分野を専門として参りました。微力ながら、これらの分野を中心に、本学会の発展と会員の先生方に貢献できるよう全力で取り組んでいく所存です。今後共、どうぞよろしく御願い致します。

JOSKAS 学会誌編集委員会は、松田秀一担当理事のもと、赤木将男先生、池内昌彦先生、岩堀裕介先生、齋藤知行先生、佐野博高先生、出家正隆先生、宗田大先生、望月由先生、吉矢晋一先生、私の計 11 名で構成されており、年 4 回発行している学会誌「JOSKAS」作成（但し学会前に発行する抄録号である第 4 号は除く）に関する運営をしています。JOSKAS 誌は 2010 年第 35 巻を発売（前身学会の巻数を引き継いだため 35 巻より発行）以降、1 号、2 号は発表論文、3 号は原著論文、を掲載しておりますが、投稿された先生方と原著論文を査読していただいた先生方には、委員一同いつも感謝しながら作成に携わっております。2011 年からは、松末吉隆前委員長の元、電子投稿サイトでの投稿を開始し、以

後、発表論文は前年度学会演題数の 20% 前後、原著論文は前年度学会演題数の 10% 前後、が掲載されています。演題数の増加に伴い、掲載数も年々増加傾向にあるため、将来は号数を増加しないといけないうる必要性も出てきます。学会誌面上での情報交換がより便利に、活発になるよう、今後も本委員会で努力して参りますので、会員の先生方には、是非ご投稿並びにご意見いただきますようお願い申し上げます。現在、本学会前学会（日本膝関節学会、日本関節鏡学会）在庫雑誌を特別価格で販売しておりますので、ご希望の方はホームページから会員専用ページにログインしていただき、「会員向けニュース & トピックス」の『注文フォーム』に記入の上、事務局へメール添付にてお送りください。

JOSKAS 委員会 委員 (2017 年 1 月 1 日現在) *…アドバイザー

委員会名	担当理事	委員長	アドバイザー／委員				
学会誌編集委員会	松田 秀一	堀部 秀二	赤木 将男 出家 正隆	池内 昌彦 宗田 大	岩堀 裕介 望月 由	齋藤 知行 吉矢 晋一	佐野 博高 —
社会保険委員会	米田 稔	須田 康文	小谷 明弘 和田 佑一	竹内 良平 —	出沢 明 —	中川 照彦 —	三嶋 真爾 —
学術用語委員会	田中 康仁	高尾 昌人	阿部 信寛 望月 由	小林 龍生 柳下 和慶	酒井 宏哉 —	二木 康夫 —	松本 秀男 —
国際委員会	井樋 栄二	黒田 良祐	黒坂 昌弘* 安田 和則	安達 伸生 —	西良 浩一 —	史野 根生 —	松田 秀一 —
倫理委員会	内尾 祐司	石橋 恭之	上松 耕太 水田 博志	岡崎 賢 —	黒田 良祐 —	中田 研 —	真柴 賛 —
COI 委員会	内尾 祐司	高橋 敏明	阿部 信寛 —	近藤 英司 —	関矢 一郎 —	津田 英一 —	— —
将来構想委員会	越智 光夫	中田 研	安達 伸生 佐藤 卓	石橋 恭之 関矢 一郎	井手 淳二 武富 修治	井樋 栄二 田中 康仁	黒田 良祐 遠山 晴一
教育研修委員会	石橋 恭之	井手 淳二	金森 章浩 堀部 秀二	上村 民子 —	出沢 明 —	中川 匠 —	中村 英一 —
機能評価委員会	出家 正隆	大森 豪	池田 浩 福井 尚志	佐粧 孝久 —	高橋 敏明 —	遠山 晴一 —	中村 憲正 —
広報委員会	米田 稔	熊井 司	大森 豪 前 達雄	荻内 隆司 —	落合 聡司 —	黒河内 和俊 —	菅谷 啓之 —
ガイドライン策定委員会	遠山 晴一	津田 英一	出沢 明* 中前 敦雄	岩堀 裕介 中村 俊康	内田 宗志 前 達雄	高尾 昌人 三浦 和知	中川 晃一 望月 由
専門医制度検討委員会	水田 博志	三浦 裕正	古賀 英之 丸毛 啓史	高井 信朗 —	高橋 成夫 —	土屋 明弘 —	堀部 秀二 —
定款等検討委員会	吉矢 晋一	北村 信人	出沢 明* 本庄 宏司	小川 宗宏 前田 朗	柏口 新二 眞島 任史	園田 昌毅 —	橋本 祐介 —
財務委員会	齋藤 知行	安達 伸生	井樋 栄二 中前 敦雄	内尾 祐司 —	越智 光夫 —	近藤 英司 —	津田 英一 —
ニュースレター委員会	越智 光夫	高橋 成夫	井上 雅之 橋本 祐介	熊橋 伸之 松下 雄彦	佐藤 卓 —	杉本 和也 —	園田 昌毅 —
関節鏡技術認定制度委員会	宗田 大	石橋 恭之	出沢 明* 土屋 明弘	落合 聡司 中川 匠	木村 雅史 中田 研	菅谷 啓之 二木 康夫	高尾 昌人 —
学会賞選考委員会	理事長および前・現・次・次々会長、編集委員会担当理事						
トラベリングフェロー選考委員会	理事長および前・現・次・次々会長、編集委員会担当理事						
役員選考委員会	必要に応じて開催						
プログラム委員会	必要に応じて開催						

変形性膝関節症（膝 OA）に対する外科的治療には人工関節置換術（TKA）と高位脛骨骨切り術（HTO）などが知られている。症例数は TKA が約 9 万件に届く一方、HTO は 10 年前の年間 700 件という絶滅危惧を乗り越え昨年は 7 千件程度にまで増えてきた。といっても TKA に比べて圧倒的に少ない。

しかし近年高齢者のスポーツ熱の高まりや、iPS 細胞の発明と応用が進む中、膝関節の真の意味での再生も視野に入れて膝温存を希望する患者が増えてきた。

HTO には Open Wedge HTO（OWHTO）（図 1）と



術前 術後
図 1

Closed Wedge HTO（CWHTO）（図 2）がある。我々の臨床研究により OWHTO 後の後療法は一変した（R. Takeuchi, et. al. Arthroscopy, 2009）。骨切り開大部に移植した人工骨（オスフェリオン 60、オリンパステルモバイオマテリアル社：OTB）は術後早期に骨との接合面で癒合し、TomoFix（DePuy Sinthes 社）の強固な初期固定力と共に早期よりの全荷重歩行を可能とした。

適応は膝関節の可動域が比較的良好で内反変形が少なく膝蓋・大腿関節障害のない

症例である。身体に与える侵襲は少なく、年齢制限はない。

一方、従来の CWHTO は筆者が発案した Hybrid 法（R. Takeuchi, et. al. Arthroscopy Tech. 2014）に新しい plate（OTB）を使用することでリハビリ期間は極端に短縮した。

適応は膝蓋・大腿関節障害を合併する症例で比較的高度な内反変形膝にも対応が可能である。また、脛骨プラトーの後方傾斜角度の調節が可能であるため ACL 不全膝に対しても前後方向の不安定性を軽減できる。

しかし、上記のいずれの方法においても大きな角度の矯正を行うと脛骨プラトーの外方傾斜角が増し、関節面に剪断応力が発生する。特にスポーツ活動の低下を招く恐れがある。そのようなケースには大腿骨遠位部と脛骨近位で骨切りを行う Double Level Osteotomy が推奨される（Benjamin A. JBSJ. 1969）（図 3）。

特に年齢が若くスポーツの継続を望む患者に対しては有効な方法である。大腿骨および脛骨の 2 か所で骨切りを行うため、適応については慎重に判断すべきである。

膝 OA に対する関節温存手術は Around Knee Osteotomy（AKO；膝周囲骨切り術）という新しい概念の時代に突入した。膝関節外科医は TKA だけでなく AKO も習得すべきである。

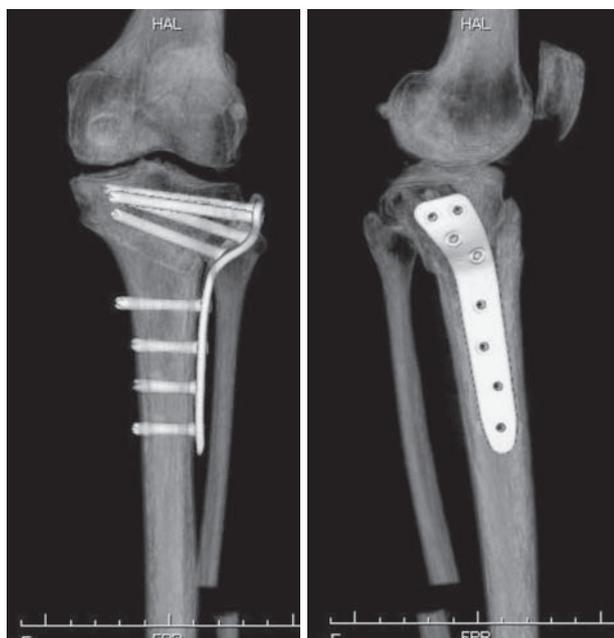


図 2



術前

術後

図 3

関節鏡技術認定制度

東京医科歯科大学大学院運動器外科学

宗田 大

関節鏡視下手術は、低侵襲的であるなどの利点から、多数の部位の手術に応用されているが、特殊な器具を用いて行う手術であり、高度な技術が要求される。2017年からの新専門医制度の発足を見据えて、関節鏡学会の悲願でもあった関節鏡技術認定制度を発足させることを決定したのは2015年の理事会であった。

本制度の整備にあたり、日本内視鏡外科学会（JSES）の技術認定医制度にならい運営されている日本整形外科学会（JOA）認定脊椎内視鏡下手術・技術認定制度を基盤とした。本制度は、一定の共通の基準にしたがって鏡視下手術に携わる医師の技量を評価し、一定の高い基準を満たした者を認定するもので、これにより本邦における鏡視下手術の健全な普及と進歩を促し、延いては国民の健康や福祉に貢献することを目的としている。実施に当たり JOSKAS として認定することに支障が少ない膝関節鏡の技術認定制度を実施することになった。

まず認定制度委員会のメンバーが招集され、JSES 理事で JOA 認定脊椎内視鏡下手術・技術認定制度の推進者でもある出沢理事が担当理事となり、委員長として私が就任した。関節鏡視下手術を行っている各関節を代表する評議員の中から委員が選抜された。次いで最初の技術認定を審査する認定委員を選定するため、50歳以上の評議員で過去300例以上の前十字靭帯（ACL）再建術執刀経験者14名に依頼して、業績と無修正の ACL 再建手術を相互にブラインドで評価した。2名ずつの評価の最低点は74点で、平均75点以上であり、これら14名を技術認定委員とした。

関節鏡技術認定制度（膝）の申請受付を2016年4月18日（月）より開始し、当初5月中旬締め切りとした。(1) から (9) の申請基準に沿って応募がなされた。過去5年間に術者もしくは指導的助手として遂行した前十字靭帯再

建術50症例および半月板縫合術30症例を応募基準とし、術者として最近5年以内に行った関節鏡視下手術のDVDまたはUSBメモリ（未編集画像）を課した。学会員の反響は大きく、約120名の応募が寄せられた。

2016年5月の理事会で再度検討し、今後の本制度の健全な発展の基盤となる第一回の認定者を決定するに際して評議員の資格に準じた業績を求めることになり、再度募集を7月まで延期した。ここで再申請条件として申請の妨げになったのは過去5年の主著論文が5編以上あることであり、指導的な立場からの申請が困難になった可能性がある。最終的に57名の申請者に対して審査が行われ、合否判定結果、合格：34名、不合格：15名、書類不備8名となった。第一回の応募に際して、基準を変更して再応募を行ったこともあり、最終審査対象者の中に書類が不十分な申請が残ってしまった。それらの8名に対しては応募そのものが行われなかったものとしてすべてを返却することになった。これら34名に加えて、14名の技術認定委員を加えた48名が第一回 JOSKAS 認定関節鏡技術認定医（膝）としてホームページに公表され、紆余曲折があった本制度が名実ともに発足した。

本技術認定制度の健全な発展のためには、技術指導を高め普及させる JOSKAS セミナーの開催と登録の活性化、技術認定の精度を上げるための認定基準や資料の充実、さらに eNote を用いた症例登録など、多くの発展させるべき課題が残っている。また申請条件に必要な業績の積み重ねについても会員のさらなる自覚と努力が求められる。本制度のもとに関節鏡視下手術の健全な発展と JOSKAS 会員の相互交流のさらなる活発化、国際的な JOSKAS の地位・発言力の向上がますます期待される。

編集後記

ニュースレター委員会 佐藤 卓 新潟医療センター

新年あけましておめでとうございます。第7号となった今回の JOSKAS ニュースレターでは年頭号ということもあり、越智光夫理事長と新理事の先生方からのご挨拶が表紙を飾りました。その他、堀部秀二先生からは JOSKAS 学会誌編集委員会での運営状況、竹内良平先生からは新しい概念である Around Knee Osteotomy についての解説、更には宗田大先生から昨年大きな反響があった関節鏡技術認定制度における認定状況などについての説明を頂きました。いずれの先生もご多忙の中、大変貴重なご寄稿を頂き誠にありがとうございました。

さて、本年は6月に奈良の田中康仁会長により「新たな飛躍

をめざして」のテーマのもと、札幌に於いて第9回 JOSKAS が開催されます。既に多くの演題が集まり興味深いセッションが企画されていることと思われ大変楽しみです。一方で、「食べること、飲むこと」が大好きな私としては、札幌は学会開催地として国内最高のロケーションの一つであり、今から「今回はどこに行ってお食べようか?」「そのためにはどこに宿泊するのがベストなのか?」と仕事の合間に市街地図をみながらPCに向かって「長考」しております。ベストシーズンである初夏の北海道で、大いに学んで、語って、食べて、飲んで、楽しみましょう!